

調べ学習を活かした社会科学習のあり方

身近な地域の地理教材開発

土佐清水市立足摺岬中学校 教諭 田村公利

1 はじめに

1998年の中学校学習指導要領改訂により、社会科の学習指導内容及び方法が大幅に転換された。その柱となるのが、知識の網羅的学習から学び方・調べ方を重視する学習への転換である。当然のことながら教科書の内容も精選され、学習内容もスリム化されてきた。そのような中で、系統的な知識が習得できないのにどうして学力が定着するのかという疑問があがった。中学校社会科担当教員は、このような不安を抱えながら授業を展開していった。

これまで、地理的分野の指導は世界地理・日本地理に分けられ、地名物産を網羅する学習が中心であった。そこに地域的特色を調査・観察する調べ学習が導入されたので、教育現場では学習指導に混乱を生じた。特に、中学校地理的分野の「身近な地域の学習」単元においては、身近な地域の諸事象の観察・調査を進めていくため、これまで以上に「調べ学習」の研究や知識が指導者側に必要となってきた。調べ学習を指導していくためには、教師自身がまずフィールドに出て調べ学習を事前に行い、指導の見通しをあらかじめ立てておかなければならないからである。所属する市町村の教科研修会でも、この身近な地域の学習について、多くの教員が悩んでいるのが現状である。

2 研究目的

このような地理教育の学習指導における教育現場での混乱は、生徒の地理教育に対する学習意欲の喪失をもたらし、思うような成果があがらない一因となっている。

そこで本研究では、この課題や指導者側の不安を解決していくことを目的として、地理的分野の身近な地域の学習に関する教材の開発を試みた。すなわち、調べ学習をキーワードに市町村スケール・校区スケールの地理教材を土佐清水市と高知市及びその周辺地域とを事例として提示した。

また、調べ学習の展開における学びのサイクルを提示した。調べ学習の成果を自己評価とリスナー評価を通してグレードアップさせることにより、調べ学習における学びに対して興味関心を喚起させ、学習の質的向上を図っていくことが期待できることを示した。そして、その原動力が教師による生徒へのアプローチと綿密な教材研究であることを示した。その際に、教材づくりとその教材の共有化が、多忙化する教員の教科指導への現状打開策の糸口になると考えた。

3 研究内容

(1) 「身近な地域」の調べ学習の意義と問題点

「身近な地域」とは、5万分の1よりも縮尺の大きな地図で読み取れる区域であり、生徒の日常生活や行動を考慮して設定される。市町村や校区でも、経済圏として複数の市町村をまとめたものでも設定が可能であり、幅を持たせ柔軟な範囲として捉えることができる。そのことから生徒の実態に応じて適切な地域設定が必要である（文部科学省、2004、pp.45-46）。身近な地域は日常生活している場所なので、多くの情報が得やすいと考えがちであるが、意外にそれは限定されがちである。歴史・地理・文化などに関してはなおさら情報を得ることが難しい。市町村合併などで歴史的地名が消え、一時の観光ブームや流行に流された地名が選択されている例がある。「身近な地域」の調べ学習は、生徒にとっても、指導する社会科担当教員にとっても地域の自然・文化・歴史を見直す良い機会となろう。それらは、教師自身の調べ学習と生徒の調べ学習の共通の教材となる。

「身近な地域」の調べ学習を推進していくには、次のような問題が存在する。すなわち、資料収集とその活用、野外調査の実践上の問題などである。

(2)「身近な地域」の地理教材開発における地図・写真の有効性とその活用

まず、どの縮尺の地図がどのようなスケールの学習に適しているのかについて考察した。2万5千分の1地形図は、市町村スケールの学習に適している。5万分の1の地形図では、地図表現が粗く、5,000分の1や2,500分の1の国土基本図では細かすぎたり、地図のサイズが大きすぎたりして実用的とは言えないからである。

国土基本図や住宅地図は、校区スケールの身近な地域の調べ学習を展開していくために有効である。2万5千分の1地形図では、住宅密集地が斜線の集合体で表現されているが、国土基本図では建物の平面体が一軒一軒表現される。土地利用の様子もより詳しく描かれている。一方、住宅地図のメリットは、世帯主の氏名、集合住宅の名称、店舗の名称が記載されているという点である。「この地域にはこのような苗字の人が多く」とか、新旧の地図を比較すれば、「この人は新しく道路が建設されて、ここに転居している」といったより細かい調査が可能である。また、商店街においては、店舗の調査を野外観察と併用して容易に行うことができる。ただし、縮尺や地形表現などの精度には欠ける。そのような理由から、国土基本図との併用が必要である。

また、写真資料の有効性と活用についても示した。イギリスでは、地理的技能として写真の読図が中等地理教科書に位置付けられており、写真が重要な地理情報であるとみなされている(梅村, 1998)。加えて、2万5千分の1地形図の読図も非常に重視されている(飯塚, 2002)。それに対して、日本の中学校地理教科書では、写真・地形図ともに、あまり取り上げられていないのが現状である。

(3)市町村スケールの身近な地域の地理教材開発

行政単位である市町村をまとまりとして土佐清水市と高知市及びその周辺域の二つの地理教材開発を行った。いずれも2万5千分の1地形図を活用し、その新旧比較を通して教材を提示していく手法を用いた。この手法では、土地利用の変化や道路・施設設備の建設状況などの地域の変容を通してその地理的事象を明らかにすることができる。身近な地域は、生徒が日常生活の中で直接見聞きし、体験することができ、学習に具体性を持たせることができる。また、地域の抱える課題や可能性、地域像も浮き彫りにして、生徒に将来の地域展望を考察させることが可能な学習である。

二つの異なる市町村の地理教材を提示したのは、高知県の地理的事象を多面的に把握する必要があると考えたからである。両対象地域には共通点と相違点がある。共通点を例示すると、高知市みづきの住宅団地と土佐清水市グリーンハイツの住宅地は、ともに市街地に近い丘陵地の坂の多い場所に造成されている。税の安い山林を開発して宅地として高く転売する不動産業などの事業は共通している。相違点をあげると、土佐清水市は陸路において京阪神方面へより遠く、高速道路も整備されていない。そのためか、人口の高齢化と過疎化が急速に迫っている。このように両地域を比較することは、高知県全体の課題や将来の方向性を探るのに有効である。

①土佐清水市域の場合

土佐清水市域は、5つの図幅にまたがっているため、1973～74年発行図と2001～03年発行図の新旧比較となった。その際に、図1(次のページ参照)のように地域A～Eを設定した。市全体を対象にする範囲が広すぎて読図のポイントが絞りにくいからである。

2万5千分の1地形図の他に、19世紀半ば安永～安政年間に描かれた『土佐国沿海浦郷図』(室戸市羽根、山本武雄氏所蔵)や『土佐国浦々之図』(安永8年頃、高知県立民俗資料館所蔵)、1948年撮影の航空写真(米軍撮影)などを資料として活用した。また、『高知新聞』から教材作成地域の最新の情報を取り入れた。

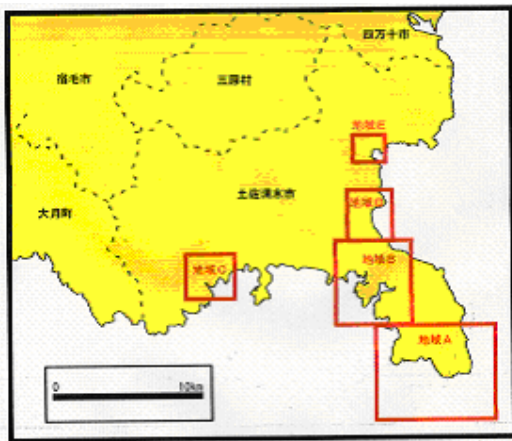


図1 土佐清水市域索引図



写真1 「渡場」東岸から戎町方面
(2006 .5 .6 . 撮影 田村公利)

例えば、図1 中の地域B には「渡場」という地名が現在残っている(写真1 参照)。2002 年発行2 万5 千分1 地形図には航路がないが、1973 年発行2 万5 千分1 地形図には点線で航路が表現されている。道路が狭く、蛇行していた足摺半島に住む人々にとってこの航路は重要な交通手段であった。この航路の歴史は江戸時代まで遡ることができる(注1)。1960 年代後半まで通学などにこの渡しは利用され、船を待つ乗客の姿が渡しの両岸に見られた。現在、渡場はたまに釣り人が糸をたらすくらいで、閑散とした光景が広がる。

地名は次代に継承すべき重要な文化遺産といえる。このように身近な地域には、社会科教材が多く存在する。それを意外と気づかずに見過ごしている場合が多い。普段の生活の中で意識して捉えていけば身近な地域は、教材の宝庫といえる。

②高知市及びその周辺域の場合

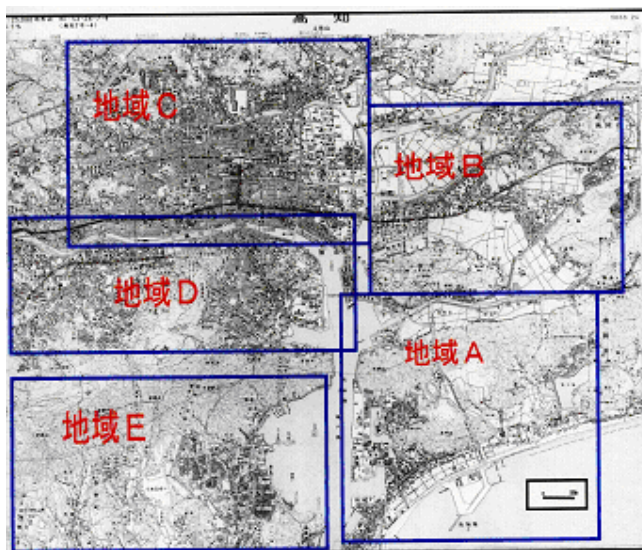


図1 地域区分索引図(2万5千分の1地形図「高知」:2003年発行)

図2 高知市及びその周辺部の地域区分索引図

高知市及びその周辺地域は、2万5千分の1 地形図「高知」図幅1 枚でほぼカバーできる。この図幅を5つの区域(図2 参照)に分け、それぞれの地域について、1978年と2003年発行図を読図し、野外観察を加えて地理的事象とその変容を明らかにしようと試みた。

ここでは地域の地理的事象を捉えやすくするための工夫として、主題図を二つ作成した。

一つは、2万5千分の1 地形図「高知」をベースマップとして、低地の多い高知市東部を海拔0 m以下の土地と20m以上の土地に色分けした。この主題図を見ると、微高地「鹿児島」が、『土佐日記』に「かこのさき」と書かれ、紀貫之が土佐国司の任期を終え京に帰途した船出の地であることがよく理解できる。また、五台山が大島と呼ばれた島であったことが頷ける。

10 世紀、この一帯は、浦戸湾の浅瀬であったと推測されている(下中邦彦編, 1983)。一帯にはそのことを裏付けるように、葛島、高須、田辺島などの小丘陸ないし微高地が点在し、北浦、舟戸、大津、横掘、福浦などの水辺を連想させる地名が多い。

二つ目は、高知市内大型小売店(イオン高知)の構内規模を理解させるために、高知市立朝倉中学校と

土佐清水市立下ノ加江中学校の構内を比較する主題図を作成した。地形図は面積が正しく表現されているので、縮尺が等しい地形図どうしをデジタルマッピングすれば容易に大きさの比較ができる。

地形図の比較では、生徒の興味関心をいかに喚起させるかが課題である。例えば、区域B（高知市東部・前のページ図2 参照）における1978年と2003年発行図の比較では、稲生に池のような水たまりができています。高知大学附属中学校1年生の地理的分野での研究授業（高知大学大学院「社会科教育実践研究I」として2005年11月4日実施）では、「この池のような水たまりは何か」という導入で授業展開していった。授業後の評価表を分析してみると、興味関心の喚起につながったことが裏付けられた。

野外調査すると、この池のような水たまりは、石灰の掘削跡に水が湧き上がったものであり（写真2 参照）、石灰成分を濾過して下田川に流していることが分かった。この稲生の石灰採掘の歴史は古く、1729（享保14）年に高知城下の豪商が藩の許可を得て採掘を行ったことに始まる（竹内理三編、1986）。その後、石灰採掘は盛んになり、稲生で石灰を掘り、下田川の水運を利用して浦戸湾岸の石灰工場にその原石を輸送した（写真3 参照）。



写真2 石灰掘削跡にできた池
(2005.11.30. 撮影田村公利)



写真3 石灰の原石を石灰工場に運ぶ舟
1939（昭和14）年、五台山八洲付近にて撮影された写真である。満潮を利用して稲生村下田に帰る手漕ぎ舟。
(寺田正編、1979)

(4)国土基本図・住宅地図及び野外調査を活用した身近な地域の地理教材開発

国土基本図を基に住宅地図や野外観察を併用し、校区スケールの身近な地理的事象を明らかにすることを試みた。その際に、主題図を作成して、地域独自の地理的事象や歴史地理的考察が深まるように工夫した。また、校区スケールの地理的教材を作成するにあたり、人間生活と地形や気候などの自然との関わりや空間的な広がりを捉えるように心がけた。

①土佐清水市立足摺岬中学校区の場合

ここでは校区内の主要集落の一つである伊佐集落を例として取り上げた。まず、中世・近世の歴史・文化を地理的事象の中から分析した。中世においては長宗我部氏の行った『足摺ノ村地検帳』（1589年）を基に、近世においては足摺岬の金剛福寺大師堂常夜灯（次のページ・写真4 参照）や松尾金比羅宮燈明台（次のページ・写真5 参照）などを基に、伊佐集落とその周辺地域の鰹漁業と鰹節加工について考察した。その際に、土佐清水市内の節加工場数を土佐清水市水産商工課から聞き取り調査したり（次のページ・図3 参照）、1989年の住宅地図と現地調査を基に中心街路の変容について主題図（次のページ・図4 参照）を作製するなどの工夫を行った。また、藩政期の絵図『土佐国沿海浦郷図』を活用して現在の国土基本図との比較を行った。近現代においては、伊佐集落北部の高位の段丘面の土地利用や足摺スカイライン・足摺山バイパスの開通と伊佐集落の変容について分析して考察した。

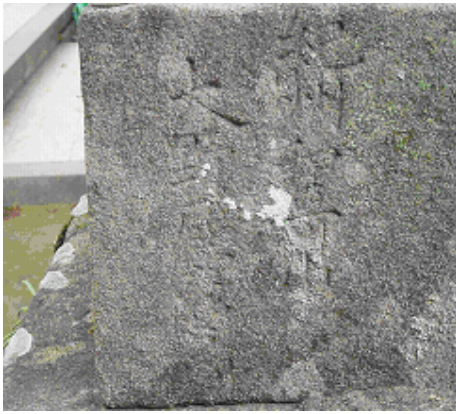


写真4 金剛福寺大師堂前の常夜灯
(1832年建立)

「紀州和歌山 大野屋」との屋号が刻まれている。足摺岬沖での鰹漁業の成功で蓄財した紀州出身の商人が寄進したものであろう。



写真5 松尾・金比羅宮の燈明台(1860年建立)
台座部分には、「下田屋」「田中屋」などの鰹節商人の屋号が並ぶ。

(写真4 2006.6.24. 写真5 2006.11.15.撮影 田村公利)

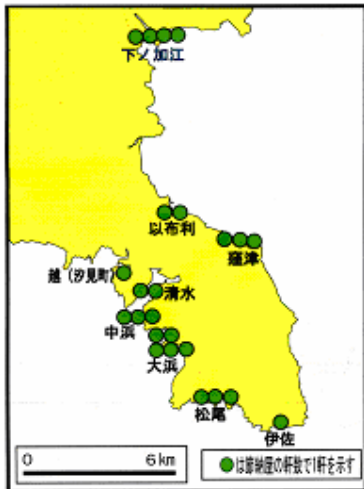


図3 土佐清水市内における鰹節加工業者の分布(注2)

江戸時代、伊佐、松尾、大浜、中浜、清水、越、養老は鼻前七浦と呼ばれた。現在もここには節加工場が存在している。ただし、越の西方に位置する養老には節加工場は現存しない。

②高知市朝倉地区米田の場合

高知市朝倉地区米田をフィールドにして国土基本図を基にした2,500分の1「高知広域都市圏図」を活用し、野外観察を併用して教材開発を進めた。地域住民が鏡川とどのように関わり生活してきたかに着目し、用水路に沿った野外観察を基に地理的事象を明らかにした。教材は、「江ノ口・鴨田堰の用水路と住民の生活」「朝倉堰・朝倉用水と住民の生活」「鏡川とその沿岸の変容」という項目で構成した。特に、水路上に点在する「汲み地(注3)」(写真6参照)や水車(写真9・10参照)による灌漑を取り上げ、地域住民と鏡川との生活上の密接なつながりを明らかにした。また、地域に伝えられる「おちよ地蔵」(写真11参照)の伝説(注4)では、歴史的に地域住民と鏡川との関わりを現在に伝える貴重な教材の一つとして紹介している。

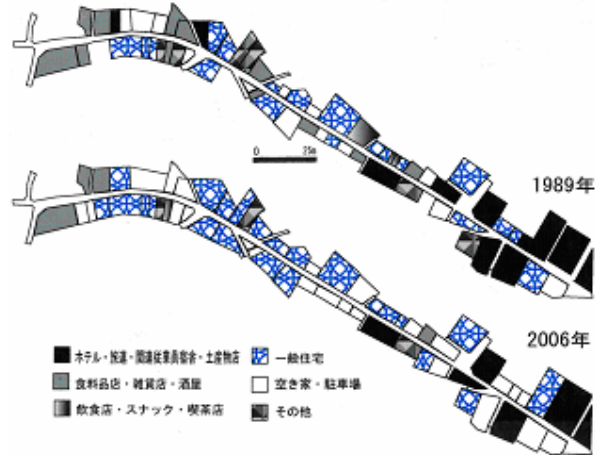


図4 伊佐集落の中心街路の変容

金剛福寺や岬に近い街路東側にホテル・旅館・土産物店などの観光施設が多い。街路西側には食料品店や雑貨店などの日用品店が多い。また、空き家・駐車場が増加し、店舗から一般住宅への変化が見られる。



写真6 朝倉用水流路上に残る「汲み地」



写真7 朝倉用水に設けられた側溝
蛍の幼虫を保護するために設けられたと思われる。



写真8 夏の暑さを凌ぐ人々
鉄道架橋下を通る水路上に涼み台を掛け
暑さを凌ぐ。



写真9 春を待つ水車
冬季の休耕田に水車が置かれる。



写真10 水車から木桶にたまる水



写真11 ちよと母親（右側）の地蔵

(写真6・7・9 2006.1.15. 写真8 2006.8.24. 写真10・11 2006.8.4. 撮影 田村公利)

4 まとめ

先行研究によれば、野外調査などの校外学習は、あまり実施されていない。「中学校学習指導に関する実態調査報告書 2006」(注5)(Benesse 教育研究センター)は、そのことを裏付けている。本研究における身近な地域の地理教材開発は、こうした現状を打開する手がかりになると考える。

地理的基本概念の一つである景観は主観的なものであり、人によって読み解く内容が異なる。つまり、地域の自然・歴史・文化についての知識が多いほど、その景観を読み解く内容は深まってくる。開発した地理教材を基に地域調査や文献調査を重ねること、すなわち、調べ学習を推進していくことによって、身近な地域の地理的事象がさらに明らかにされていくものとする。

身近な地域の教材開発は、教員側の調べ学習である。それを基に授業で生徒側の調べ学習が展開される。生徒の調べ学習の内容を見て、教員の調べ学習が深まる。さらに、教員と地域が連携する。このように調べ学習は、身近な地域の学習内容を広げ、考察を深めていく。研究テーマの「調べ学習を活かした社会科学習」とは、教員と生徒双方の調べ学習が相乗効果を生み、社会科学習が充実していくことを指している。

本研究を基に、今後さらなる授業実践を積み上げて、社会科学習の充実をめざして取り組んでいきたい。

注

- 1) 1778(安永7)年5月、就任まもない土佐藩浦奉行沖真潮が幡多郡の浦々を視察するとき、大月町から土佐清水市域に入り、この渡しを渡り、中浜峠に抜けたという記録が残っている(『西浦廻見記』)。
- 2) 2006年12月4日、土佐清水市水産商工課海洋振興係・和泉氏の教示による。
- 3) 2006年8月4日、高知市朝倉地区米田在住、伊野部精子氏からの聞き取り調査によると、水路はまだ現在のようにコンクリートで固められておらず、石垣で築かれていた。地域の人々は「汲み地」で食器や野菜を洗った。
- 4) 米田・鴨田一帯は、昔から川の氾濫という自然の猛威と戦ってきた。鏡川堰の右岸の堤防上に建立されている「おちよ地蔵」は、そのことを如実に物語っている。「おちよ地蔵」伝説は以下のような内容である。幕末期の頃、この一帯は、毎年洪水が続き川の決壊がみられた。ある年、水神を鎮めるために人柱を立てることになった。母親と幸せに暮らす13歳の百姓娘ちよにその白羽の矢が立てられた。ちよは母の面倒を見てもらう条件で、人柱になることを承諾した。ちよの犠牲の後、何年かの歳月が過ぎ、村人たちはちよとの約束を忘れ、母親は一人寂しく死んでいく。ある年の夏、大雨が降り洪水がこの地域を襲った。人々は、ちよの母親の面倒を充分見なかったからであると嘯きあうようになった。村人は母子の慰霊のため、二体の地蔵を堤の上に建立した。(1996年7月おちよ地蔵脇設置看板、発起人・市原隣太郎・三谷一彦・中川幸男より抜粋しまとめる。)
- 5) ベネッセコーポレーション株式会社・Benesse 教育研究センターによる「中学校学習指導に関する実態調査報告書 2006 教務主任・理科教員・社会科教員に対する調査から」(2006年11月)の報告がなされた。全国中学校1～2年社会科担当教員21,878名にアンケートが配布され、有効回答数4,577名(中学校1年2,260名〔49.4%〕、中学校2年2,317名〔50.6%〕)であり、有効回答率20.9%であった。

文献

- 飯塚耕治(2002):イギリス初等地理科における地図指導 - 1990年代後半の実践事例を中心に-, 新地理 50-2, pp.1-12
- 梅村松秀(1998):地理的技能としての写真読図, 地理 43-8, pp.31-39
- 下中邦彦編(1983):『高知県の地名 日本歴史地名大系 40』平凡社, 755p.
- 竹内理三編(1986):『角川地名大辞典 39 高知県』角川書店, 1590p.
- 寺田 正編(1979):『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 高知』国書刊行会, 164p.
- 文部科学省(2004):『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説-社会科編-』大阪書籍, 208p.